

き日よりは庭へひろげてほしあげ、扱家内中かゝりてもみこなし、其葉を紙袋におし入れ、しめりけ虫氣のつかざる様に、心を用ひ手入をして、年毎におほくたくはひおきけり、かくて此ききの時にいたり、此芋の葉の貯を出して、雜穀にまじえつゝ、くひければ、そくばくの日數うゑを凌ぎて、大きにたすけとなり、又人にもあたへしときこえしは、よき心がけと知るべし。

〔西遊記續編^三〕飢饉 近年打つゝき五穀凶作なりし上、天明二年寅の秋は、四國九州の邊境飢饉して、人民の難澁いふばかりなし、余^{○南}橘^{○南}などが旅行も、道路盜賊の恐れありて、冬深き頃などは、

所々逗留して用心せり、さて春になりても、諸國とも米穀ますゝ、高直に成り、余など途中白米一升を大かた百四十文ばかりを出して求たり、國々城下までも、多くは麥飯、粟飯、琉球芋、大根飯の類を食し取つゝきたり、村々在々はかすねといひて、葛の根を山に入りて堀食ひしが、是も暫くの間に皆ほりつくし、金槌といふものをほりて食せり、是もすくなく成りぬれば、すみらいといふものをほりて、其根を食せり、葛の根、金槌の類は、其根をつきくだき水にさらし、夫をだんごに作りて、鹽煮にして食せり、春のころにいたりては、鹽もけしからず、高直に成しかば、これをも求めかねて、海邊に出て潮を汲來りて、其潮にて右の金槌團子を煮て食す、すみらいといふものは、水仙に似たる草なり、其根を多く取おつめ、鍋に入三日三夜ほど水を替煮て食す、久しく煮ざれば、ゑぐみありて食しがたく、三日ほど煮れば至極柔らかに成、少し甘味も有様なれど、其中にゑぐみ残り、余も食しみるに、初め一ッはよく、二ッめには口中一はいになりて咽に下りがたく、はや三ッとは食しがたきもの也、されど食盡ぬれば、皆々やう／＼に是を食して命をつなぐ、哀れ成事筆に書盡すべきに非ず、余一日行勞れて、中にも大に奇麗なる百姓の家に入て、しばらく休息せしに、年老たる婆々一人なり、いかゞして人のすくなきやと尋ぬれば、父子嫁娘皆今朝七つ時より、すみら堀にまゐれりといふ、夫ははやき行やふ也といへば、此所より八里山奥に入らざればす